

理論社会学のいくつかの概念の随伴による一考察

— 自己組織性・言語ゲーム論・第三者の審級を例に —

日本郵便広島支店 大山智徳

1 目的

この報告の目的は、圏論という新しい数学の極めて重要な概念である随伴が理論社会学に飛躍的な広がりをもたらすことを自己組織性、言語ゲーム論、第三者の審級を例に示すことにある。

2 方法

まず、S. Awodey の随伴の定義をベースに自己組織性、言語ゲーム論、第三者の審級をそれぞれ随伴に mapping する。

【随伴の定義】

随伴とは関手 $F : \text{圏} C \rightarrow \text{圏} D$ 、関手 $G : \text{圏} D \rightarrow \text{圏} C$ と

自然同型 $\phi : \text{Hom}_D (F C, D) \cong \text{Hom}_C (C, G D) : \phi$ からなる。

この定義は F と G について対称であるという特典をもつ。

随伴である単元 $\eta : 1_C \rightarrow G \circ F$ と余単元 $\varepsilon : F \circ G \rightarrow 1_D$ はこのとき

$\eta_C = \phi (1_{FC}) \cdots \textcircled{1}$ $\varepsilon_D = \phi (1_{GD}) \cdots \textcircled{2}$ として決定される。 \square

この随伴の定義に社会学の基本的な概念を mapping する。社会への言語と論理から構成される圏を圏 C とし、リアルな身体群とそのふるまいから構成される圏を圏 D とする。関手 F と関手 G は共に外的視点と呼称され、本報告では便宜上、 F を対象化、関手 G を言語化と緩く mapping しておく。

自己組織性の二つの圏はシステム次元と行為次元、言語ゲーム論では言語ゲーム論と言語ゲーム、第三者の審級はやや強引ではあるが言語化されたふるまいのルールを圏 C とし、現実に生起する出来事の圏を圏 D とする。なお、この定義①で生起する現象は②と同時に「双対に現象」している。

3 結果

その結果、自己組織性における意味は行為次元においては自省の意味として、システム次元においては意味として双対に現象する。また、「言語ゲームには外がない」ならば言語の圏としての「言語ゲーム論には外がない」が双対に帰結される。第三者の審級の構成概念である「求心化作用／遠心化作用」は関手 F と関手 G であり、①にリアルな身体として、②に抽象身体として双対に現象する。

4 結論

一見繋がりが無いかのように現象した極めて創造的な三つの社会的概念を随伴の定義に mapping することで新しい結果を示すことができた。本報告は随伴の一端を示したに過ぎず、たとえば機能要件を関手とみなせば構造-機能理論は新たな展開をみせるであろうし、カフカの「掟の門前」の寓意、ベンヤミンの「神的暴力」、ドゥルーズ＝ガタリの「リゾーム」の随伴への mapping も興味深い。随伴を含む新しい数学である圏論への理解が理論社会学をよりシンプルで強固なものにするであろう。

文献

Awodey, S. *Category Theory*. 2ed. (=2015, 前原和寿訳『圏論—原著第2版』共立出版.)

橋爪大三郎, 1985, 『言語ゲームと社会理論—ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン—』勁草書房。

今田高俊, 1988, 『自己組織性—社会理論の復活—』創文社

落合仁司, 2015, 「社会と行為 —コールマン・ボートとマクロ・ミクロ・リンカー」『理論と方法』30(1):117-125.

大澤真幸, 1988=1999, 『行為の代数学』青土社。